

[研究論文]

# 永平寺町の景観構造と特性を活かした景観形成計画・課題

北 條 蓮 英

## 1. はじめに

### 1-1 景観の定義と研究目的

景観とは「人間をとりまく環境のながめにほかならない。しかしそれは単なるながめではなく、環境に対する人間の評価と本質的な関わりがある」という中村の定義<sup>1)</sup>がよく引用される。つまり景観はながめの主体（人）の美意識や感性等の主観的条件によってその評価が分かれる、心的現象といえる。こうしたメンタルな事情もあって景観は法に馴染まないとこれまで考えられてきたが、21世紀に入りようやく景観法<sup>2)</sup>が制定された。

立法の背景はいろいろあるが、そのひとつの要因に「景観利益」をめぐる近年の景観訴訟を通じて司法から示された一定の見解があると考えられる。以下この点を見る。2002年12月国立高層マンション訴訟に対する東京地裁判決では「景観利益」を認めたものの高裁は認めない判断を示した。またこの本訴の前の仮処分申請の段階で高裁は、根拠法の欠如を指摘した<sup>3)</sup>。結局最高裁は2006年上告を棄却したものの「景観利益」について認める判断を示した<sup>4)</sup>。

最近の軀ノ浦の景観訴訟では広島地裁の判決（2009年10月1日）は「景勝地軀ノ浦の埋め立て架橋事業に対し文化的、歴史的景観は住民だけでなく国民の財産というべき公益で、事業で重大な損害の恐れがある」「必要性や公共性の根拠となっている点について調査や検討が不十分か、一定の必要性や公共性があったとしてもそれだけでは埋め立てを肯定する合理性を欠く。」<sup>5)</sup>として埋立て免許交付を差し止めた。これは事前の段階で差し止めを許容し「景観利益」を認める画期的判決といわれる。しかし直ちに広島県は上告したが、景観訴訟が新しい段階に至っているとみることができる。このように景観は一人ひとりの主観との関わりにおいて成立するが、それを享受する地域コミュニティとして評価がまとまるときその景観価値は客観性を有するといえることができる。

ところで景観法では景観の定義はとくに規定していないが、基本理念（第2条）において包括的な視点が示されている。すなわち景観は地域固有の自然、歴史・文化を背景に人々の生活、農林業や商工業の営為等の上に積み重ねられた結果として存在し、良好な景観は現在及び

受付日 2010. 4. 15

受理日 2010. 6. 7

所 属 福井県立大学看護福祉学部

将来における国民共有の資産であるとしている。

こうした認識からして景観を構成する個々の要素は、私有財であっても総体としての環境的ながめとしての景観は公共財という性質を有するといえる。つまり景観は「わがまち・むら」を「愛でる」住民の心によって生まれ景観をキーワードとするまちづくりに展開する可能性を示唆する。また地域社会（コミュニティ）でのそうした努力が積み重ねられることによって景観価値が形成されていくものと考えられる。

福井県下における景観行政の状況（10年4月現在）について景観行政団体が11市町、景観計画（景観マスタープラン）は6市町が策定済、うち景観条例は5市が制定済みである<sup>6)</sup>。町レベルでは、06年2月に誕生した永平寺町は合併後間もない同年10月町として県下初の景観行政団体になった。直ちに永平寺町景観協議会<sup>7)</sup>を設置し景観計画策定に着手する。同協議会において景観の現況情報の共有・可視化の視点から景観基礎調査を実施した<sup>8)</sup>。そして08年5月景観計画書が町長に答申された。今後行政・住民・事業者間の議論を通じて実効性のある景観条例等の施策につなげていくことが課題である。本論では、『永平寺町景観計画』（平成20年5月）の成果を活用しながら永平寺町の景観の構造を明らかにした上で特性を活かした景観形成計画の方向と課題を考察する。

## 1－2 景観基礎調査の概要

景観計画に繋げていくねらいから人間の視点と主対象の関係性に着目して以下の3種の景観基礎調査を実施した。すなわち、①. 町内の日常的景観をできるだけ多く把握するため公道上

表1 景観基礎調査の概要

視点位置・主対象	調査概要（目的、方法）
A. 視点位置を与件	1) [景観1次調査]。調査は、県立大学学生、町職員の協力を得た。 公道上の任意の地点で四周の景観（近景、中景）撮影。地点はあらかじめ住宅地図（概ね1/1,000）の公道上の一定間隔（標高150m以下、公道：200～300m程度、河川沿線：500m程度）で選定。この結果によりブロック毎の景観カルテの作成、景観の類型化により地域（大、小）毎の景観特性を把握。2006年11月～07年2月。1200地点、画像計、3665点。
	2) [景観2次調査]。調査はコンサルタントの協力を得た。 町界あるいは町域内の山地（7つの山地）の可視領域の抽出のため公道上を視点位置として当該対象の山地を撮る。幹線道路を主に10ルート、撮影地点は300～500mピッチで設定。2007年10月～11月実施。169地点。画像計872点。
B. 主対象を特定	3) 旧勝山街道沿道（旧街道は歴史地図で照合）にみられる町並み、画像19点。町職員の協力を得た。（以下、4）～6）も同じ。
	4) 樹木等（屋敷林、神社境内林、巨樹巨木）、
	5) サクラ。開花時期にあわせて撮影（2008年4月）。対象付近の近景、遠景。所在地点を地図にプロット。
C. 視点場を特定	6) 視点場を九頭竜川の8つの橋上とし上流方向、下流方向。

注）上記Cでは、協議会委員、地元在住のカメラマンの景観画像の活用のほか文献による個性的景観、視点場を参照（引用）した。

で無作為抽出した視点（視点与件型）での景観撮影。1次調査（06～07年）では町内平地（標高150m以下）の1,200地点、2次調査（07年）では町界・町内の7つの山地の可視領域を抽出するため公道上の169地点を視点とした。②. 主対象を特定した調査（主対象特定型）、③. 視点場を特定した調査である（詳細は表1を参照）。

ここで景観構造の理解のため先述の定義を敷衍する。景観は主対象と視点場に立つ主体との関係において成立する視覚現象である。

視点場とは視点の存在する「場」を意味し、視点近傍の空間を表す（図1）。

なお景観計画を実効性あるものにする手順は、まず調査計画レベルと、引き続く景観条例の住民合意形成レベルがあるが、今回の基礎調査については、この第1ステップのものと位置づけた。基礎調査にあたり協議会委員、地元在住の写真家らの情報提供等の住民参加の形をとることにした。

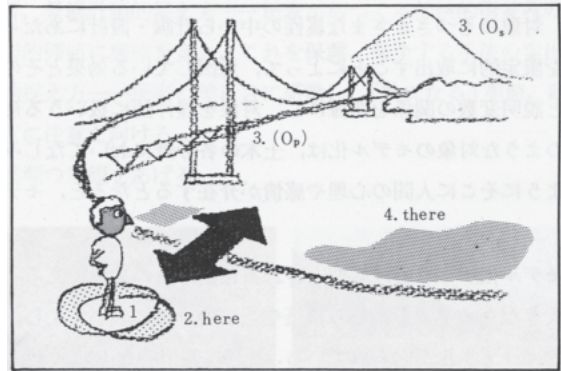


図1 景観把握モデル（1視点、2視点場、3主対象、4対象場）  
（出所）土木学会編・篠原修著（1982）「新体系土木工学59  
土木景観計画」技法堂 p28

## 2. 景観計画の意義

永平寺町の景観計画の意義としては、以下の5点をあげる。

### 1）合併による町域拡大と九頭竜川を軸とした景観まちづくりへの契機

永平寺町を構成する旧町村（松岡町、永平寺町、上志比村）は九頭竜川の流域で隣接して立地し地形、土地利用状況や住民生活の点で共通性が多い。住民意向調査結果<sup>9)</sup>（平成15年10月）によると「まちづくりに活かすべき資源」として九頭竜川、大本山永平寺、福井大学医学部・県立大学の3大要素をあげ、そのトップは九頭竜川である。また「まちの将来像」については「住みやすく便利、快適なまち」、「安全・安心に暮らせる福祉のまち」となり「自然を活かし景観、緑を大切に」に対し半数近く（47.9%）があげる。すなわち九頭竜川をまちづくり資源としてとらえ、また景観まちづくりへの潜在意識が強いとみることができる。合併前のまちづくりでは住民意識の中にはどちらかという町村界という地理的境界が存在しなかったわけではないが、合併による行政サービスの統合・一体化したこと、生活圏の拡大、住民間の相互交流が徐々に進展していくことは不可避といえる。いいかえると、まちづくり視点がそれまでの「わがまち」から「より拡大化したまち」に広がっていかざるをえず、九頭竜川は景観まちづくりにおける大きな要素になると考えられる。

## 2) 景観は超高齢社会におけるまちづくりのキー（鍵）概念

超高齢社会に加えて人口減少社会を迎えるなか高齢者が住み慣れた地域で孤立することなく住民同士の接触や交流、趣味、生きがいをもってその人らしい生活の送れるようにすることが健康寿命を保つ秘訣といわれる。高齢者が暮らしやすい社会は若い人にとっても快適で楽しい町であるといえよう。このとき山や川、町並み、家並み、田園等それまでに馴染み親しんできた生活環境や景観に取り巻かれて暮らしを送ることは高齢者の介護予防や認知症予防の視点からみても意味が大きいといえる。とくに緑や川は癒しの働きは大きいといえる。自然、歴史文化等の景観要素の保全と育成、活用が高齢者のイキイキ、ハツラツした生活を支える基盤といえる。すなわち景観は環境、福祉と並び大切なまちづくりキーワードといえる。

## 3) 日常の生活景、自然景観を大切にすることを育む住民活動

大本山永平寺は、福井県を代表する景観資源であるが、永平寺町内にはこれ以外に山、川、田園、集落等が融合した個性的な里山景観がふんだんにみられる。景観は観光来訪者だけではなく定住者の日常生活における眺め（生活景）を通じて実は安らぎ・潤い、心の癒しを得ている。ありふれた景観要素であるが、生活の質（アメニティ）に大きくかわる。こうした生活景の再評価がされるべきである。山・川等の自然環境への人々の関心はますます高まり、そこを拠り所に活動をすすめる自発的住民・NPOが増えている。こうした活動は一見景観を直接対象としていないけれども、結果的に生物多様性の保全、自然景観への気配りにつながっている。例えば九頭竜川での稚魚放流のボランティアグループ・サクラマスアンリミテッド<sup>10)</sup>は、これまで17年にわたってサクラマス稚魚放流活動に加えて地域の小学校と連携した環境教育を通じて「九頭竜川にとってサクラマスがいかに大切な存在であるか」を発信し続けてきた。平成21年秋、これまでの活動成果に立ってサクラマスレストレーションという組織に衣替えし次の目標として産卵場の整備という再生に力点を移している。また、「でこんぼの森」という作陶グループは、浄法寺山麓を拠点に「自然を愛する人が集い、語らい、文化や自然学習、自己開発も行いながら地域づくりや青少年の健全育成」<sup>11)</sup>を目標に活動している。手づくりの穴窯2基で自然の中で陶芸を楽しむかたわら、「森に学び、自然から学ぶ里山の学習スタイル」<sup>12)</sup>の場をつくり地域の子どもたちへの陶芸、自然体験の支援を行っている<sup>13)</sup>。以上2つの事例にみる活動は長い目でみて山や川の景観を愛でる心を育むことにつながっていくにちがいない。

## 4) 地域構造の変化に伴う景観の異質的変容への予防的対応

地域景観は幹線道路、河川等の公共施設の整備もしくは災害やその復興事業による変容は避けられない。変化の度合によっては変化が徐々であったり急速であったりする。前者の場合、周辺環境となじみあいながら時間をかけて調和的に推移するので景観上問題になることは少ない。しかし後者の場合は留意がいる。今後予測される環境変化因子としては、中部縦貫自動車道路<sup>14)</sup>、同道路に伴うJCT(ジャンクション)と同関連道路の整備でありJCT周辺や関連道路



沿道における土地利用の変化、建物のビルドアップが想定される。また経済・情報のグローバル化を背景に産業構造の転換に伴い生産機能の縮小転換、農業の耕作放棄地等の増大、土地利用の転換が不可避といえる。とりわけロードサイドの土地利用変化は外的因子の闖入により景観的には無国籍風ファサードデザイン（全国どこでもあるようなファーストフード型）が出現する。今後こうした土地利用の変化に対し景観計画を策定しておくことは、予防的意義がある。

### 5) 景観法というゆるやかな枠組みの活用

都市計画は合併前の指定状況をそのまま引き継ぐ。旧松岡町では九頭竜川を境にして福井都市計画区域と嶺北都市計画区域の2つの都市計画区域が指定され、後者では未線引きで用途地域のみ指定済である。また旧永平寺町、旧上志比村は、それまで非都市計画区域であったが、平成19年度準都市計画区域に変更（ただし用途地域は未指定）された。一方、農業振興地域が町全域にわたって田園を主に広く指定されている。

このように1つの自治体のなかで複数の都市計画が指定されているため、住民から見ると町内比較をしたとき規制内容がわかりにくい、計画決定の手続面からみても煩雑で非効率的である、土地利用の誘導を的確にスピーディにすすめるに、といった問題があることは否定できない。

ところで景観法は都市も農村も等しく対象にし、景観行政団体の意志、姿勢を尊重した柔軟なシステムといえる。わが国は戦後、都市は都市計画法で対応し農村は農業振興法で対応という縦割りのしくみが貫徹してきたが、景観法は対象地域を区別せずに景観を切り口に土地利用行為の規制誘導（コントロール）をはかるという点で地域づくり政策に風穴をあけたともいえる。景観法の適用により、都市計画の区分いかにかわらず景観を切り口に土地利用や建築、屋外広告物等に対する共通の誘導目標が設定され規制誘導が統一的に運用できる可能性が生まれたといえる。

## 3. 景観特性

### 3-1 地形構造

景観は輪郭により際立つ。輪郭線とは、「ある視覚現象において『図<sup>ず</sup>』（Figure）となる領域と『地<sup>じ</sup>』（Ground）となる領域との境界につくり出される線のことであり、ゲシュタルト心理学では、図の領域の末端として図に属し、地の領域に所属しないものとされている。輪郭線は、このように図となるものの形を規定する線<sup>15)</sup>をいう。つまり山や河川、集落、町並み等の輪郭は基本的に地形により影響をうけるといえる。永平寺町の景観の輪郭把握のため地形構造をおさえる。図2は福井県の地形分布をしめす。

同図により永平寺町の地形構造の特長を読みとる。

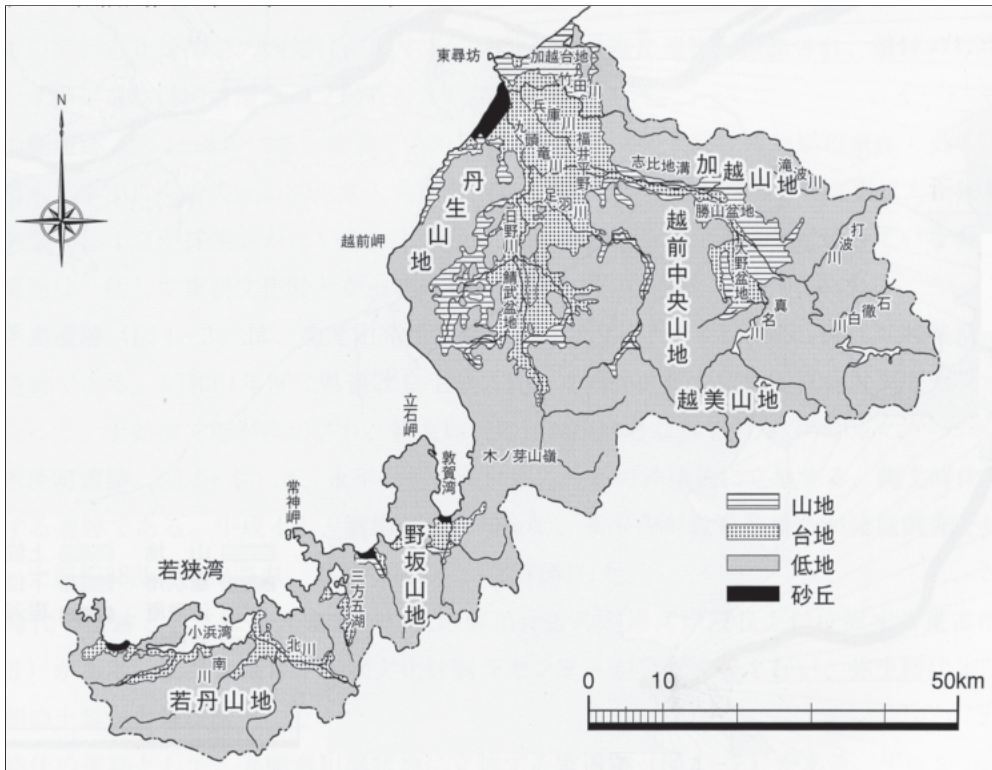


図2 福井県の地形分布図 (出所)「史跡松岡古墳群保存管理計画書」永平寺町教育委員会、平成18年度、p3

i) 地勢的に永平寺町は、越前中央山地と加越山地とで大半(山地・原野面積が行政区域の約75%)を占める。両山地の谷部の志比地溝帯に九頭竜川が西流し、そこに支流の永平寺川等の多くの中小河川がそそぎ込む。九頭竜川の両岸には河岸段丘が形成し、また支流による扇状地・段丘上に集落、市街地が形成し、また低地、谷部に田園、集落が立地する(図4)。

ii) 志比地溝帯の途切れる鳴鹿付近に鳴鹿大堰が設置され、これを扇頭とし下流域において扇状地(坂井平野)が広がる。用水路が網の目のように張りめぐらされ、福井県内農地の30%(約1.2万ha)が取水し農業生産の基盤となっている<sup>16)</sup>(図3)。



図3 坂井平野の用水路網

(出所)「千年水路が開くふくいの未来」(九頭竜川下流域農業用水再編推進協議会ほか発行)

iii) 九頭竜川と裏川にはさまれた五領ヶ島（上合月・下合月・末政・渡新田・兼定島）では洪水時の不安解消（治水対策）が長年の悲願であったが、九頭竜川の大改修（1900～10年）、裏川の廃川敷化（1960～68年）によりこれが実現する。旧河道敷は宅地化され医科大学（現福井大医学部）、同付属病院、福井県立大学等の高等教育機関等の都市開発により新たな都市的景観が出現した。永平寺町内の景観の大転換をもたらしたものといえる。

iv) 町界を成す山地の最高峰は1000m級の浄法寺山（標高1053m）で、次いで800m級は冠岳、仙尾山<sup>17)</sup>、大仏寺山である。また剣ヶ岳、鷲ヶ岳、経ヶ峰（約760m～800m級）、吉野ヶ岳（547m）が町界の輪郭線を作っている（図4）。

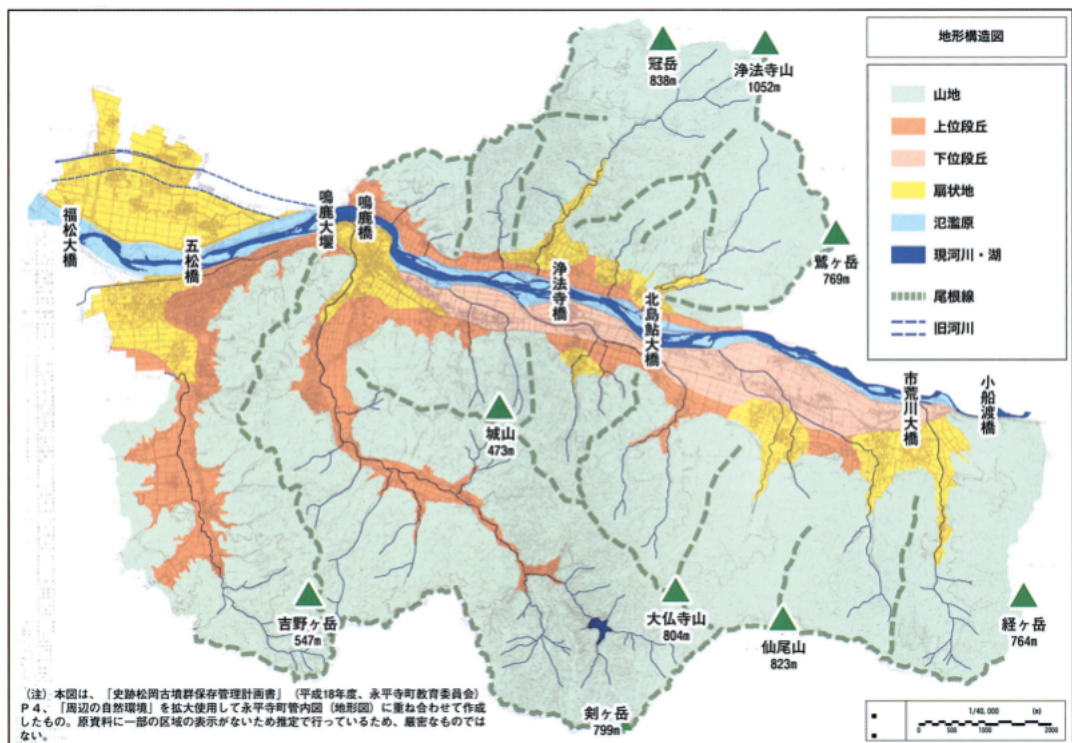


図4 永平寺町の山地と橋 (出所) 永平寺町「永平寺町景観計画」平成20年5月 p2

### 3-2 地形図からみえてくる地域構造の変容

国土地理院（戦前は陸地測量部）作成の地形図を時系列的に通観することにより地域構造の大きな変容をみることができる。初めて作成された地形図（1/50,000）は1909年で以降約100年間に戦前3時点、戦後7時点の地図が作成される<sup>18)</sup>。ここでは最も古い1909年と戦後の高度経済成長期の1964年、そして最近（1982年）とを比較する。変化の要因は九頭竜川の大改修、鉄道の敷設と廃線、幹線道路（国道8号線、北陸自動車道、同福井北IC）の開通等のインフラストラクチャの整備、福井地震による震災復興都市計画等の面的整備事業、旧河道跡の開発



等である。図5は、九頭竜川五領ヶ島付近の最近の地形図に明治末の河道を示したものの<sup>19)</sup>で、その変容の大きさが伺える。

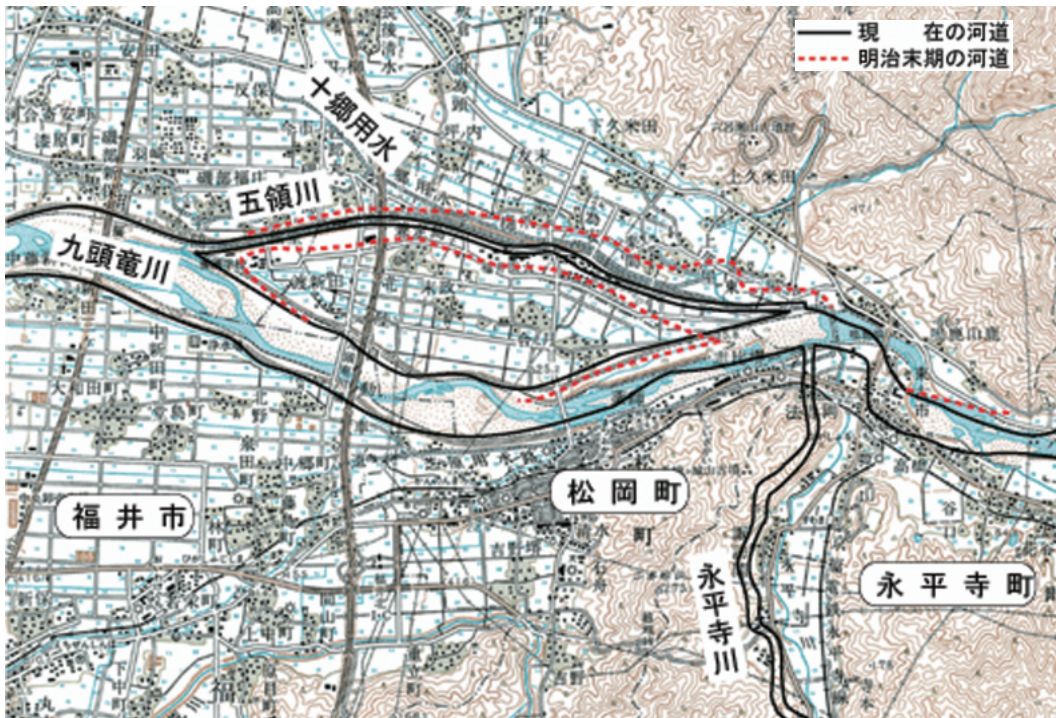


図5 九頭竜川（五領ヶ島付近）の新旧河道

（出所）九頭竜川流域誌編集委員会「九頭竜川流域誌」九頭竜川水系治水百周年記念事業実行委員会発行、平成12, p274

次に市街地の分布は松岡を中心に面的に形成し東古市方面に展開する。市街地の状況を表すDID（人口集中地区）<sup>20)</sup>によりその変化をみる。DIDが初めて出現したのは65年（昭和40年）の旧松岡町でその規模は0.8km<sup>2</sup>（人口4,768人）であった。その後徐々に広がり80年同1.4km<sup>2</sup>、90年同1.5年km<sup>2</sup>と65年の倍近くまで伸長した。しかしその後やや縮小し00年1.4km<sup>2</sup>、05年1.39km<sup>2</sup>になっている。一方、人口密度は05年40人/ha、00年比5.4%減となっていて人口の空洞化傾向がみられる。

近年の土地利用の変化をみる。資料のある10年間（93～2003年）の地目別変化では水田が7%減の一方、宅地は15%増であることから、農地の宅地化がじわじわと進行しているといえる。DIDの基準に満たないような低密度の宅地が周辺ににじみ出している。既存集落での人口減の一方で周辺農地の休耕地化、宅地の蚕食化が進行している。景観的にいえば田園景観のなかに規格化された標準的な建売住宅が点在した景観がひろがっている。

### 3-3 町全体の景観構成

景観調査結果を使って町全体の景観構成の特長をみる。

## 1) 景観の類型化

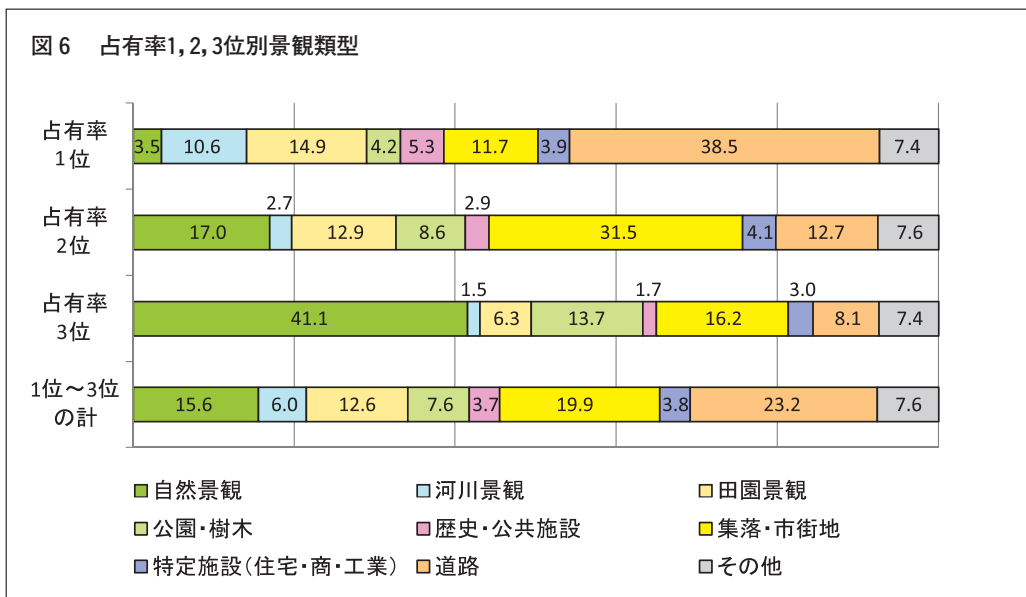
景観1次調査で得た画像（計3,665点）について景観の類型化を行う。まず予備的作業として21区分に細分類したが、最終的に9区分の中分類に整理した<sup>21)</sup>。その上で画像の占有率（面積比）上位3位までの景観類型コードを付した。この結果得られた景観類型の特長をみる。

## 2) 全町の特長

一般的な傾向を景観占有率1～3位計でみると、道路景観が23%と最多となり、次いで集落・市街地景観（20%）が多く、自然景観（16%）、田園景観（13%）が続いている（図6）。ここで道路景観が多いのは撮影地点を公道上に設定し撮影者の視点が立位の姿勢で4方向撮影という調査方法を採用したため、道路の軸線方向の画像では道路の占有率が大きく占めることになったためである。

次に占有率順位別にみる。占有率1位の景観類型の1位は、4割近くを占める道路景観で、同2位では、集落・市街地景観が最多（32%）で、次いで自然景観（17%）、道路景観（13%）が続く。占有率3位では自然景観が最多（41%）で次に集落景観（16%）次いで、緑・樹木景観が3位（13%）に浮上する。

以上から、永平寺町の景観構成の特長は、自然景観、河川景観、田園景観があわせて4割弱と大きく占めている。これに加えて集落・市街地景観がそれぞれ融合しあって景観の魅力を生んでいるといえる。





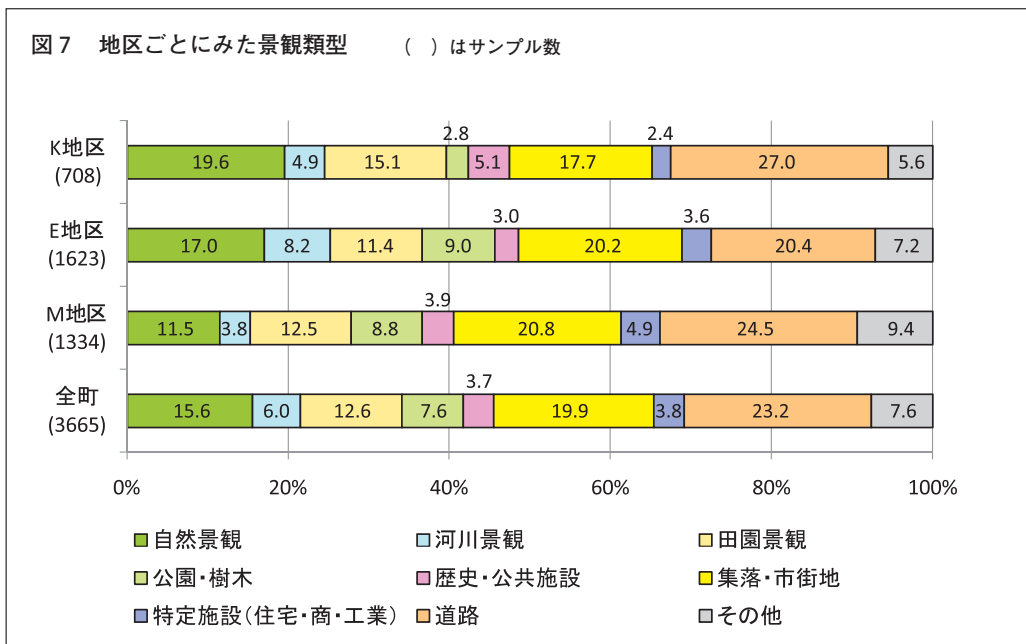
### 3) 地区別にみた景観の特長

#### i) ブロック別景観カルテの作成

町域を地勢（山・川）、地形（水系、扇状地・段丘、等高線）等の自然条件、土地利用状況、公共施設（道路等）を考慮して可能な限り細かく22ブロックに分ける。ブロックごとに景観特性、課題の抽出、典型的写真を景観カルテ（紙幅の関係で略）としてまとめる。

#### ii) 地区別にみた景観

地区（大区分）は合併前の町村単位（松岡＝M、永平寺＝E、上志比＝K）とする。まず地区別にみた景観特性をみる（図7）。上流部にあたる上志比地区では自然景観、田園景観の比率が高く、次いで中間部の永平寺地区が続いている。鳴鹿大堰の下流部にあたる松岡地区では、都市化が最も進み自然景観は上志比より8ポイント低く田園も少ない。河川景観は、永平寺地区では8%と最も多いが、これは九頭竜川の両岸が含まれるためと考えられる。公園・樹木景観は、松岡・永平寺地区ともほぼ同じ9%みられるが、上志比地区ではわずか3%で両地区の1/3程度である。ただ公園が少ない分、田園景観が多いことにより緑系を補完しているとみられる。



## 4. 景観資源の評価

景観計画策定という課題に向けて自然、歴史文化、社会的側面からみた景観資源（要素）の評価を行う。この場合永平寺町固有の地域特性、つまり永平寺町らしい個性的景観の表出がみられるかどうか。また観光流入、交流人口等の来訪者の視点だけでなく、いまひとつは生活者

の視点からもみておくことが大切である。景観資源の典型事例を図8に示す。



図8 景観資源の典型的事例(一部のみ掲載)

注) 画像提供 ③: 中村継夫氏、⑤⑩: 天谷菜海氏、⑨: 町資料

#### 4-1 輪郭をつくる山地景観の特性

景観の輪郭をつくる要素には山地の尾根線（稜線）や湖や海岸等の水際線あるいは河川の蛇行線がある。周囲に一定の仰角以上の山地を望見できるとき、その土地は心理的安寧が得られるといわれる<sup>22)</sup>。永平寺町の場合、大景観は北方面に浄法寺山・鷺ヶ岳、南方面に城山・大仏寺山・仙尾山等、東方面に経ヶ岳が見られる。つまり北南東が山地で囲われ西に開かれた構造をなしている。しかし、標高は1,000m程度あるいは以下の決して高くはなく、ごく普通にありふれた山並みといえる。

各山地の眺望性について町域レベルと町域を超えるレベルに分けて考察する（各山地の分布は図4、図11を参照）。

##### （1）町域レベルの山地景観

町域レベルの主たる山地の眺望と特性をのべる。

- i) 町内最高峰の浄法寺山周辺は植生上福井県のすぐれた自然データベースに選定されている<sup>23)</sup>。冠岳は日本海の眺望点としても卓越し、またレクリエーション空間（青少年旅行村、キャンプ場等）としても県民によく活用されている。市街地に間近に迫るこの山の眺めは、高さがあるぶん雄大である。新緑や冠雪のときは印象的といえる。浄法寺橋付近からの眺望は、手前に九頭竜川の水辺との対比美は特質的である。
- ii) 鷺ヶ岳は溶岩ドーム<sup>24)</sup>で稜線が比較的美しい。この可視エリアは広く、町外の福井市内藤島通り（R416号）から東方向に遠望すると稜線の輪郭美がある。鷺ヶ岳はその名前のように視点によってはさながら羽根をひろげた鷺の姿にみえる（図8①）。それゆえ景観計画においてはランドマーク（目印）の可能性はある。
- iii) 松岡古墳群は二本松山（270m）丘陵を中心に約150基からなる古墳群で、うち8基は前方後円墳（4基は国の史跡指定）である<sup>25)</sup>。二本松山は五領地区からみた姿は目前に迫って九頭竜川に北方面に地形が落ちている。霧のかかった風景はさながら水墨画の趣がある。また手繰ヶ城山（図8⑨）から眼下に眺望できる九頭竜川・田園景観は独特な視角性と景観美がある。
- iv) 吉野ヶ岳は泰澄大師縁の越前五山<sup>26)</sup>の1つとされ、別名蔵王山といわれる社殿をもつ霊場が山頂付近にある。ただし当山の可視エリアは限定的である。
- v) 城山天城の山頂・尾根上には波多野城跡（県指定文化財）があったとされる<sup>27)</sup>。里山景観の典型といえる。

##### （2）複合可視エリアの抽出

周囲の山々ができるだけ多く眺望できる場所は景観計画において視点場としての価値をもつ可能性がある。まず上記7つの山について各々の可視エリアを抽出し、次にそれらをオーバーレイ（重なり）させて複合可視エリアを抽出する。調査方法は、景観2次調査結果の画像デー



タおよび杉本智彦（2009）<sup>28)</sup>によるアプリケーションを活用する。

吉野岳、剣ヶ岳の可視エリアは予備検討により限定的であることが把握できたため、これを除く4つの山の頂（浄法寺山、鷲ヶ岳、経ヶ岳、二本松山）の複合可視エリアを抽出する。具体的にその眺望点は光明寺、浄法寺、岩野の一带と、いまひとつは五領地区の一部にある。

### （3）白山連峰の眺望エリア

一般に白山とは標高2,700メートル前後の御前峰、剣ヶ峰、大汝峰の白山三峰の総称である。ここで「白山連峰」という呼称は白山国立公園（特別保護地区）内ある白山三峰に接する山地や南の方の岐阜・福井県境の尾根（三ノ峰、一ノ峰等）までを含める。

白山連峰の眺望は福井市域では広範に見られるが、とくに連峰全体の眺望が雄大で見応えがある地点は足羽山公園（福井市）とされる。今回調査により永平寺町域からはごく一部の地域ではあるが、その眺望性が得られることが確認できた。

すなわち、白山連峰の可視エリアは小舟渡橋から上志比地区の公共施設ゾーンにかけての一带である。小舟渡駅近くの断崖上にある「白山遥拝松」<sup>29)</sup>付近から白山の眺望が良好だったとされる。かつて白山信仰が隆盛した頃は大勢の庶民で賑わいがあったと想像される。上志比地区からは立地条件の関係で、九頭竜川の川面の要素が加わることで、山と川の融合した景観価値が大きいといえる（図8③）。図9は上志比小から白山連峰展望図を示す。

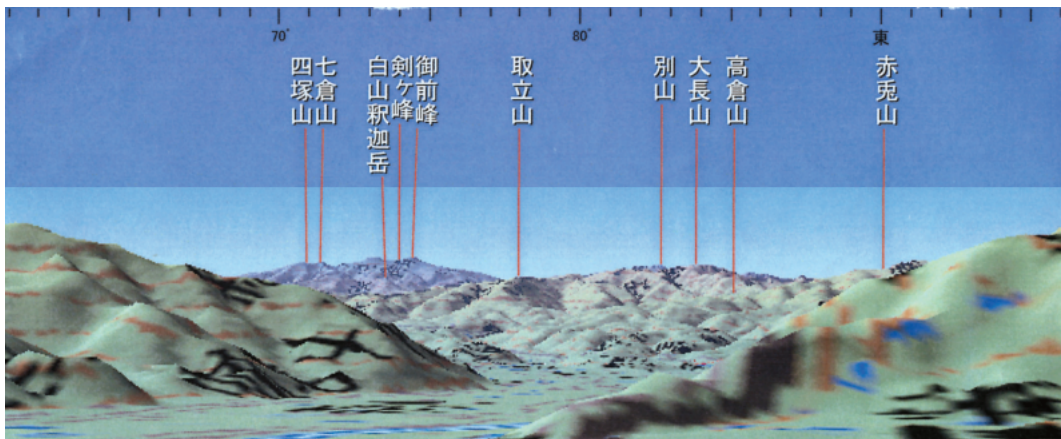


図9 上志比小学校付近から白山連峰の展望イメージ（白山三峰の主峰剣ヶ峰、御前峰を望む）

注）視点は、緯度：N36° 04′ 10.8″、経度 E136° 24′ 16.3″、標高：170m

適用ソフト：杉本智彦（2009）「カシミール3D入門」実業之日本社

## 4-2 河川景観の特性

九頭竜川には永平寺川、犀川その他中小河川が支流として流入する。永平寺町の景観資源として圧倒的な存在感を示す本流・九頭竜川と永平寺川に焦点をあてて景観の特性をみる。

## (1) 河川空間としての特長

九頭竜川の空間構造からみた特長として以下の5点をあげる。

- ア) 永平寺町域の九頭竜川は同中流域（ほぼ勝山橋あたりから福井市に入って九頭竜川最後の瀬にあたる中角橋あたりまで）に位置する。この流域は、水質について良好である<sup>30)</sup>。生態系としてあるべき姿の「付着藻群落」<sup>31)</sup>がみられ生物多様性（種類）が保持できる環境が残っている。アラレガコ（国指定天然記念物）<sup>32)</sup>はじめ多数の生物固体の生息が確認されている<sup>33)</sup>。
- イ) 流域面積は2,930km<sup>2</sup>、幹線流路延長116km、嶺北地方のほとんどをカバーする。九頭竜川は一級河川（109水系）のうち流域面積で20番目、幹川流路延長で40番目である<sup>34)</sup>。つまり流路延長あたり流域面積が大きいといえる。
- ウ) 勾配について日本の河川は欧米のそれと比較して「長さが短くて流れが急」であることから、大雨が降るとすぐ水かさが増し洪水になるとされる。かつて九頭竜川は「暴れ川」「崩れ川」といわれたが、古代よりくりかえしなされてきた治水・利水のための開発、明治の大改修、昭和の大改修、奥越地域総合開発（電源開発用ダム）等により洪水リスク、不安は著しく低下している<sup>35)</sup>。
- エ) 河川の高水位が市街地の宅地の地盤高より高い天井川となっている。このため河川（堤防、水辺）に人が気軽に接近するには物理的な障壁があるといえる。
- オ) 鳴鹿大堰を境にして上流と下流とで河川景観は大きく変わる。鳴鹿大堰そのものは景観的に配慮されたデザイン<sup>36)</sup>となっているが、それを境に上・下流部とでは河川の流量、水位の点で差異が大きく、河川景観の様相が大きく変化する。ちなみに流量比では鳴鹿大堰上流は同下流の平水流量比<sup>37)</sup>で1.4～1.6倍の開きがあるが、この差が農業用水（渇水期に最大46m<sup>3</sup>/s）に活用されていることになる。

## (2) 個性表出の河川景観

川も景観の輪郭をつくる要素であり、また河川景観は視点位置、眺めの方向（視線）により実に多様である。また河川の流量による変化が大きく、洪水期と平常時、また平常時では増水期と渇水期により変動、季節や気象条件等により影響を強くうける。静穏状態では、視点を水面に近づけることにより河川の生態や生命感をより強く感じることができる。以下に流軸景、対岸景、水上景、俯瞰景の4つの景観タイプをとりあげる。

### 1) 流軸景

「川の流れの方向（流軸）に沿う眺め」を流軸景<sup>38)</sup>という。橋から上流あるいは下流を眺めるときに得られる景観タイプである。九頭竜川は幅員が長大で下流部の福松大橋の長さは約460m、上流部の小舟渡橋でも同220mもあることから、都市河川と異なり両岸の一体化はみられない。



橋からの眺望は、人々の生活風景を愛でる眺望の場であった。ただ九頭竜川は天井川のため周りの市街地より標高が高く、空の視界を遮るものがないという天空開放性の点で遠望景の視点場になりうる。

視点を水面に下ろすと、「流れる水」の表情をとらえられるが、流量（水量）と水の流れる水路（河道）により大きく左右される。瀬では流れがありせせらぎが聞こえるようで、表情はいきいきとし、みるだけで気持ちが洗われ癒しがえられる（図8④）。例えば「入院患者の90%は、川を眺めると心がやすらぐ」といわれる<sup>39)</sup>。また水が生命の源という精神性を感受する立場から鈴木は、「川のせせらぎに耳をかたむける時、ただごとではないと感じる」と述べる<sup>40)</sup>。一方淵では満々とした水かさは落ち着いた穏やかな感覚になる。淵には藻が発生し魚が棲息する。こうした川の多様な表情から生命尊重の学習効果や精神性が感受できる。

上流部の小舟渡橋、北島鮎大橋付近に立つと水面との距離感が下流の橋よりも一層接近するので、川のせせらぎ、流れの変化を五感で感じることができるとともに、流軸の背景の白山連峰が眺望できる。

五松橋からの河川水面を俯瞰すると、「九頭竜川の水面に浸かって釣りを見る楽しみ」、「鮎釣師の点景」は絵画的味わいがある（図8⑤）。動きのある点景はスポーツ観賞としてのながめ、「水と人との関わり等の風景」を楽しむことができる。

橋からの遠望景は、下流にいくほど広角の眺望が得られ、中州の自然度が増す。季節、天候の条件が加わり微妙な変化が生まれる。具体的には、i) 福松大橋や五松橋から日本海方面に沈む夕陽の風景（図8⑩）、ii) 逆に東方面を仰いだときの山地景観、iii) 五松橋からの九頭竜川堤防に咲く満開の桜の眺め、iv) 山地と河川とが気象条件の変化により生み出される独特な景観（冠雪の鷲ヶ岳（図8①）、水墨画を彷彿とさせる霧のかかった松岡古墳群等）などである。

## 2) 対岸景

対岸景は「川の流れの方向とはほぼ直角に対岸方向を見るながめ」をいう<sup>41)</sup>。遠景の山地と山際の集落と近景の水面、水辺や岸辺で構成される。平野部を流れる河川とは異なり、谷部の背景となっている山地との一体感、落ち着きのある景観をみせている。山地の標高は浄法寺山を除いて600～800m程度の低い山々で大きく見上げるほどの仰角にはならない。視線を低くした場合の景観では、水辺の自然植生（雑草・雑木）の繁茂状況、水辺の自然護岸、散歩道等の親水性空間としての活用が図られている。独特の淵景観として本覚寺・永平寺中学校付近（図8⑥）が見どころといえる。

## 3) 水上景

水上景とは「水面上の視点からのながめ」<sup>42)</sup>で、水面利用者の視点からのながめである。川に立ち込んでいる鮎釣師は釣りそのものの醍醐味はもちろん眼前に広がる山地等の自然景観を

仰ぐとき得られる癒しの喜びが大きいと想像される。流れのある九頭竜川では水上景を享受する機会は容易に得られるものではないが、親水空間（河川敷公園）付近でのいかだ流し、灯籠流し、ラジオ体操等の機会に水上景を体感することができる。

#### 4) 俯瞰景

俯瞰景とは「河川空間外の高所から河川を中心とした広い範囲を一望するながめ」<sup>43)</sup>をいう。空からの俯瞰景として写真家中村継夫氏（永平寺町在住）は視点を鳥の目の位置から眼下に広がる永平寺町の航空写真を数多く撮影している。そのひとつにダイナミックに蛇行する九頭竜川の景観がある。

### 4-3 歴史文化的景観

#### (1) 大本山永平寺と参道と一体化した歴史風土景観

大本山永平寺は1244年道元禅師により創建され、境内地（33ha）七堂伽藍をはじめ大小70棟余の堂閣が回廊で結ばれた歴史的文化財空間（境内地全体が町指定史跡）である<sup>44)</sup>。山門（県指定文化財）と五大杉、経堂は修行のもつ厳しいイメージと重なり森厳さを一層増幅する。背後の大仏寺山等の自然景観と融合・一体化して景観的価値が大きい。

本山永平寺に至るルート（道）や川とその沿道にひろがる田園集落までを含めて「歴史文化的風土」としてとらえる視点は、この景観資源の意味あいを一層増幅させる。

本山永平寺に参拝する観光客の交通手段は、かつては鉄道（旧京福電鉄線）が大きな役割を担っていたが、運行停止・廃線（2000年）以降は、国道364号による車・バス依存が主体になっている<sup>45)</sup>。かつて司馬遼太郎が49年に永平寺を訪れたときは「外界からの訪問はなくまことに雲水の道場としてよく清規がまもられている感じで、山も谷も人も清澄である印象があった」が、その後（80年）訪れたとき「永平寺に近づくとき客を吐き出したバスが多くうずくまっていた、さらにいくと、路上も林間も鳴るようであり、おそれをなして門前から退却してしまった」と記す<sup>46)</sup>。

国道364号東古市交差点から本山（山門）までの距離は延長約7,000m、車で約15分程度。地形的には市街地景観（永平寺口）～田園景観（諏訪間）～京善（集落景観）～市野～荒谷の谷あいを経て少しずつ昇り坂になり、本山に接近するほど等高線が次第に高くなる独特のシークエンス景観（視点を移動させながら次々と移り変わっていくシーン（場面）が顕著な場合をいう<sup>47)</sup>）といえる。

#### (2) 歴史的町並み

松岡地区の歴史的町並みは、往時の様式がそのまま保全されている町家はほとんどみられない。松岡は江戸時代初期（1645年）、松平昌勝が芝原の荘に松岡藩を設置し1721年福井藩に統合されるまでの77年間藩政が敷かれ城下町の歴史があった。

図10は、松平文書館所蔵の松岡藩制下の町割図で、九頭竜川を背後に控えた堀のある平城で

あることがわかる。旧勝山街道沿いの現在の町並みは、城下町の町並みを彷彿とさせるものが見られる。国道416号の一筋南の春日1・2丁目は、城下町の本町筋に相当し、伝統的な表構えをもつ町家（図8⑭）が点在し、また416号の北側の神明1丁目の通りにも伝統的町家が数件みられる。いずれも2階部分の階高が1階よりも高くほとんどが大正から昭和期につくられたとみられる。国土地理院64年版以前の地形図には勝山街道沿いが主要な道路でその沿道の市街地が明確になっている。戦後（1948年6月）、福井地震により甚大な被害<sup>48)</sup>を被り、県下の町制として初めての都市計画法が適用され被災地（約75ha）において震災復興土地区画整理事業が施行（1948～53年）された。道路は拡幅されたものの、配置パターンはほぼ従前の形態が継承された。

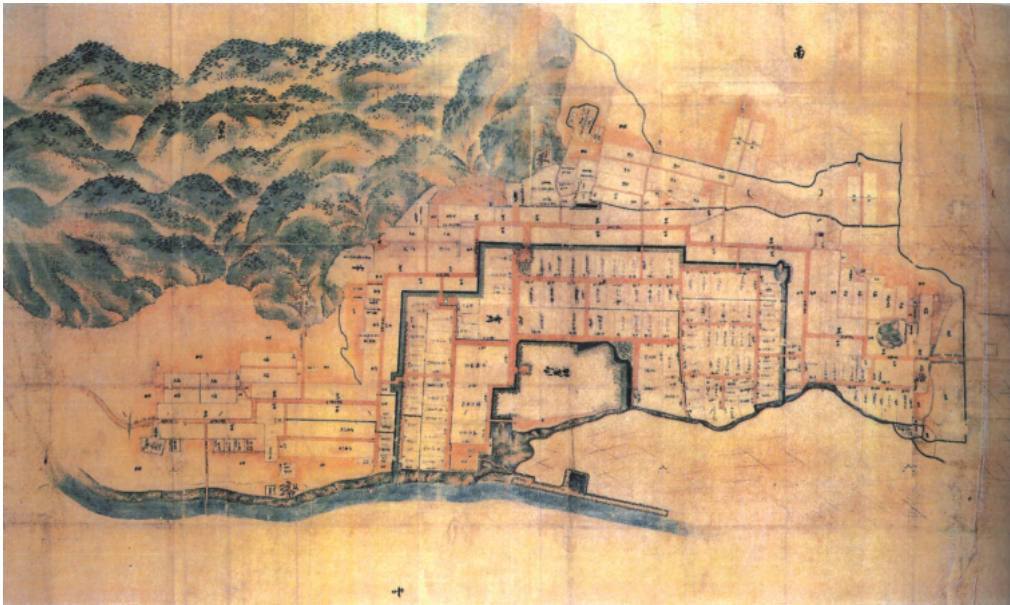


図10 松岡城下の絵図（正徳4年、1714年）（出所）松平宗祀蔵（福井県立図書館保管松平文庫）

#### 4-4 個性表出の景観要素

景観資源のうち個性表出の個別要素として、ア）旧家・古民家等古建築、イ）巨樹巨木、屋敷林、境内林等、ウ）さくら並木、エ）農業景観、オ）地区計画等による町並み形成がある。

##### （1）旧家・古民家等の古建築景観

景観1次調査結果によると古民家等の伝統的和風住宅の外観に特長がみられる。すなわち寺院建築風のそりのある屋根、漆喰壁の破風、美しい軸組の切妻屋根、風格のある門などである（図8⑭⑮⑯）。これらは本山の造作に関わる志比大工<sup>49)</sup>の技術あるいはその流れを組む大工による施工と考えられる。古民家も少なくとも単身高齢者が守っている例もある。また、大正時代のレンガ倉庫は活用したい資源といえる（図8⑰）。

## (2) 樹木景観

「福井県のすぐれた自然、植生編・自然環境基礎保全調査（第4回巨樹・巨木調査）」によると、巨樹巨木は町内には34ヶ所あり、主な樹木はケヤキ、クスノキ、イチヨウ、スギ等である<sup>50)</sup>（図8⑦）。また、神社、寺院の境内林、宅地の屋敷林が町内の随所にみられ、町歩きをしていてもやすらぎと癒しが得られる。

今回の景観調査によるさくら並木の立地分布は町全体で329ヶ所みられる。樹木の分布・集合状況について3類型（点状、線状、面的）に区分する。地域別には松岡地区が181ヶ所で町全体の過半（54%）を占め最多であり、線状分布（堤、並木）と点状分布（神社、邸宅、公共施設等）が目立つ（図8⑫）。永平寺地区では点状分布が、また上志比は数的には少ないものの点状分布と面的分布（公園）がみられる。なお、興行寺（上志比）の枝垂れさくら（図8⑧）は枯死寸前のものを専門家（樹木医）の知恵を借りて再生したとして注目されている<sup>51)</sup>。

## (3) 農業景観

景観法では農業振興地域の農業生産を維持しつつ良好な景観を継承すると位置づけている<sup>52)</sup>。景観調査結果によると、占有率1位の景観類型は、道路景観を除き田園景観が15%と最多であり、また占有率2位でみても13%みられる。つまり田園景観が日常的に身近にみられることを示す。土地利用からみても農用地で、農業振興地域の指定を受けている大規模（20ha以上）な農用地が広がりみられることから十分にうなづける。植物の育成に関わるので景観的には四季の変化が目に楽しい。水を張った鏡のような水田景観、苗代、成長した稲穂、レンゲ米（図8⑪）、黄金色に輝いている麦畑、白いそばの花いっぱいの畑など農業景観がみられる。耕作放棄地もみられるなかこうした営為は景観的にも意義深い。

## (4) 地区計画制度等による町なみ景観形成

住民合意による地区計画制度、建築協定制度を活用した町並み形成事例が数地区ある。図11は、それらを含み景観形成の何らかの努力の跡のみられる事例を示す。けやき台地区の建築協定（95年）では、周辺の山々に囲まれたまとまった規模の住宅地開発であることから、低層の町並み景観（高さ、屋根、壁の色彩）、かき・さくの緑化を定めている。地区計画が適用された平成地区では隣接した2地区がある。A地区（約1ha）は北陸自動車道沿いの地区で店舗併用中層住宅、中層住宅（高さ13m）とし周辺住宅地の居住環境に配慮する。その東側の地区（約2.4ha）では1戸建専用住宅（高さ10m）として居住環境の形成（最低敷地面積200m<sup>2</sup>、外壁後退）を図る。地区計画制度の適用の背景には、大学に近接した立地条件から賃貸集合住宅の建設需要が見込まれ、低層住宅との混在を未然防止するため中層住宅地と低層住宅地の調和をはかることが課題とされた。最近の市街化調整区域内での地区計画では開発にあたり建ぺい率を低く（30%）おさえた事例もみられる。





図11 良好な景観形成事例

#### 4-5 周辺との調和に欠ける景観

一方で周辺景観と調和しない違和感のある景観、景観形成上やや不適切なものも散見される。

- ①道路沿道にみられる大きさを競いあう屋外広告物の乱立。(本山永平寺に至るこのルートでは遠方から来訪者の心理的備えの空間として抑制気味のデザインがとれないか)
- ②山麓土取り跡地は町外にあっても視野に入るるのでその景観は痛々しい。
- ③田園景観の中でスケールの大きな大規模建築物(運輸倉庫業)の壁は違和感がある。
- ④人工的な三面張りコンクリート護岸は田園景観に不釣り合い。
- ⑤基盤整備された市街地にもかかわらず、緑の少ない潤いに欠ける単身世帯マンション群、背景の山並みに突出するマンションは殺風景な景観。

以上のような軽視できないもしくは不適合といった現象に対し景観施策面において的確に対応していくことが景観誘導上の課題といえる。また自動車社会に伴う沿道の土地利用が前触れなく突然転換する可能性がある。このためにも景観計画の作成以降において引き続き景観条例の制定による対応を的確にすすめることが課題といえる。



## 5. 景観形成計画の目標と展開

永平寺町の景観構造の特質をみた上で景観形成計画の目標と計画展開について『永平寺町景観計画』に基づきながら要点を述べる。

### 5-1 景観構造の特質

永平寺町の景観構造は概括的にいうなら、自然系、歴史文化系と社会生活系（生活様式の都市型化）とがクロスオーバー（重層）しながらも前者が色濃く見られる点に特徴がある。

まず自然系。緑豊かな山並みの自然景観と東西に雄大に流れる清流・九頭竜川等の河川景観に独自性がある。これらとの関係で成立している田園・集落景観および市街地景観は落ち着いた景観構成を成している。これは田園系と集落系が一体融合化していたからである。

第2の歴史文化系。まず大本山永平寺は背後の自然と一体化して森厳なる雰囲気醸す景観資源であり、ここに至る国道364号沿道一帯はいわば本山への参道機能として歴史風土軸を成してきた。次に松岡の旧市街には藩政時代の町割に町家が点在し、希薄化しているものの歴史を感じさせる景観資源が部分的にみられる。

さらに松岡古墳群は、北陸の古代史研究で欠かせない歴史遺産として近年注目され、あわせて住民生活における身近かな癒しの空間といえる。

第3に五領地区の旧河道敷に開発された学術文化拠点（大学等）の波及性が隣接の集落および市街地は部分的に連担<sup>33</sup>化しつつある。過去から継承されてきた集落景観も、生活様式の近代化、都市化の過程で徐々に空間の内外にわたって変質していく動向にある。

第4に広域交通幹線である中部縦貫自動車道路の今後の整備、機能補償道路沿道の都市施設整備に伴い沿道の土地利用の変化が中長期的に予測され、今後景観面の環境変化への対応が課題である。

### 5-2 景観形成の目標

上位計画の『永平寺町総合振興計画』（平成20年3月）における将来像は「うるおい・やすらぎ・人がきらめくまち えいへいじ」としている。また関連計画である『永平寺町環境基本計画』（平成20年3月）では「禅の心が息づく 緑と清流のまち えいへいじ」を理念とする。これらのまちの将来像や理念をふまえた永平寺町景観形成の目標は以下の3点とする。

#### 1) 地域の特性を活かした個性的な（永平寺らしい）景観づくり

ここで「永平寺らしさ」とは、永平寺町に有する地域固有の自然・歴史・文化の織りなす景観資源に加えて先人達によって育くまれてきた生活文化、町民気質等の要素が複合してかもし出される精神性が含まれる。この精神性は『環境基本計画』において謳われている先述の理念とその態度に通じるものがある。共生・循環型社会にあって本山のお膝元の自治体として「モノを大切に・無駄にしない」価値観はとりもなおさず景観を大切にする精神風土と共通する。

水・みどり・土等の身近な環境への気くばりは歴史・文化を大切に思う心と共通し、これがひいては景観をはぐくむ態度に通じる。

## 2) 「守り」、「育て」、「直す（改善）」等の多様な知恵を駆使して進める景観づくり

良好な景観形成には10年から数十年の営みの積み重ねを要する。文字通り子・孫の代につながる未来指向のまちづくりといえる。良好な景観を「守り」、「育て」ること、それだけでなく良好な景観形成に影響をあたえるような事象に対しては「改善」つまり「直す」ことをも視野にいれて取り組みを進める。このため「少しの我慢が全体の利益に」なるといった知恵をいかに共有できるかが課題となる。

## 3) 住民・事業者・NPO・行政が協働してすすめる景観づくり

景観は国民共通の資産という認識にたつとき、永平寺町の景観のありようは、身近な町民だけでなく国内外の来訪者の関心事となる。良好な景観形成は各主体の連携なしには奏功しないことは先行事例が教える。各主体間の創造的協同（パートナーシップ）の関係の構築が21世紀のまちづくりのキーワードである。その際にNPO法人や志のある住民、専門家等の主体の役割は大きい。その典型事例を〈2.景観計画の意義〉においてとりあげて言及した。こどもから高齢者まで幅広い参加と生活を通じて自然・河川景観への関心が高まることが期待される。例えば子どもの稚魚放流体験により「つなぐ生命」の大切さ、生物多様性を学ぶ環境学習につながり、さらには川の汚濁と生活の関わりに思いをはせる。河川を身近な環境としてとらえ河川景観への意識の向上というように、きっかけはあそび感覚であってもその体験・参加を通じた学習により景観を大切におもいう心を育むことになろう。こうした動きは水平型で自発型市民の活動の中で生れる可能性が高い。

### 5-3 永平寺町の景観形成計画の方向

永平寺町は、町全域を計画対象区域とし、景観資源条件<sup>54)</sup>（図12）を踏まえて景観基本計画図<sup>55)</sup>（図13）を策定した。その方向について要点をのべる。

#### 1) 河川景観軸の形成

九頭竜川とその沿岸一帯を河川景観軸として設定しその景観保全を図る。河川軸とは、水の流れる河川空間だけでなく管理上河川に含まれないものの地形的に河川と一体的な土地（氾濫原等）、田園も含む概念である。河川軸の意義は、河川の持つ役割の多義性を理解し生態系や環境の保全、共生の視点から親水的活用を積極的に図ることにある。

#### 2) 山地の景観の保全・育成

永平寺町の山地は、谷部を流れる九頭竜川と不可分の関係にあり、右岸と左岸とではやや山地景観の違いがあるが、こうした山地景観の保全、緑化の育成を図る。

#### 3) 松岡古墳群の保全・活用と整備

手繰ヶ城山、二本松山をはじめとする松岡古墳群は、市街地に近接立地の価値がある。この

立地条件をいかし河川や市街地への眺望性、住民のレクリエーションの場、社会教育、健康づくり施策への活用、山地の保全とともに古墳公園の位置づけ、整備を図る。

#### 4) 歴史風土景観軸の形成

圧倒的な存在感を有する大本山永平寺と本山に通じる空間軸（永平寺川、国道364号、京福鉄道永平寺線廃線敷）、沿道集落、門前街がいわば参道機能としての意味をもたせた歴史風土軸として景観形成をめざす。

#### 5) 田園集落景観の保全・育成

永平寺の景観を特長づけている市街地や集落の外周に広がる水田、まとまりのある農用地の景観は、これらの保全を図る。

#### 6) 市街地景観の整備

都市計画用途地域が指定されている松岡地区を中心に家屋等が連担した市街地が分布するが、さらにえちぜん鉄道の光明寺駅周辺まで伸びる。今後建物の更新（増改築、建替え）の機会に、景観の適切な誘導が望まれる。

#### 7) 歴史的町並みの保全修復

旧勝山街道沿いに残る数少ない歴史的な町並みの保全・修復を図る。また、山地との接線ともいえる山麓地ではできるだけ坂の特性を活かした景観づくりを図る。

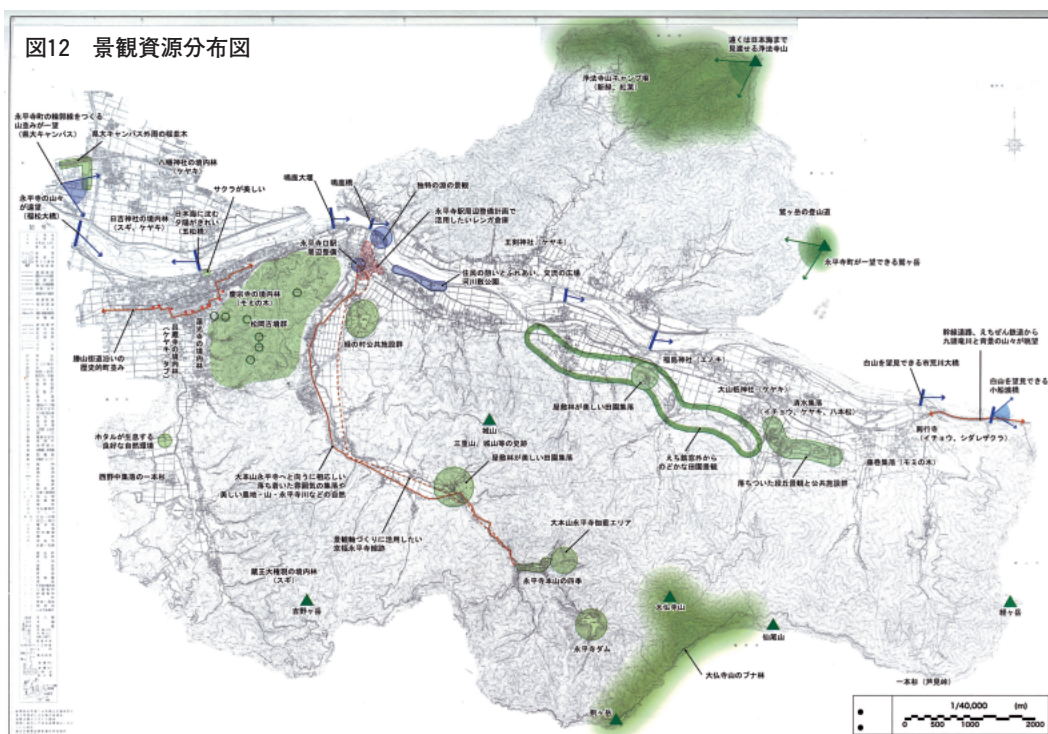
#### 8) 学術文化交流拠点および軸の景観形成

高等教育機関、専門学校、研究所等と関連サービス機能の立地・集積した兼定島一帯は学術文化交流拠点として、また相互の拠点をつなぐ都市施設（道路）沿道を学術文化軸として位置づけ軸の景観魅力の向上を図る。

#### 9) 広域交通景観軸

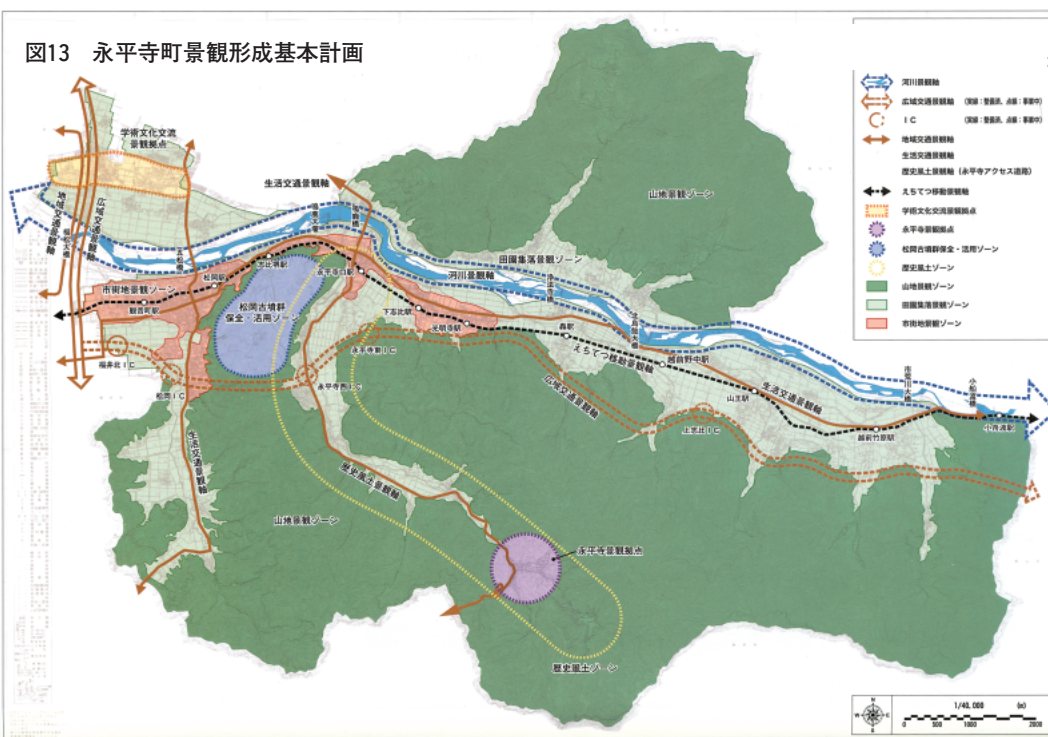
北陸自動車道と中部縦貫自動車道との接合により IC の再配置等により新たな景観の誘導をすすめる。また同ルートが山麓部を貫通することから、山地の景観保全、集落や田園の景観を十分に配慮する。また、関連整備される機能補償道路沿道は、土地利用の変化が予測されることから周りの田園や集落景観との調和に配慮をした景観形成を図るものとする。

図12 景観資源分布図



(出所) 永平寺町「永平寺町景観計画」平成20年5月 p61

図13 永平寺町景観形成基本計画

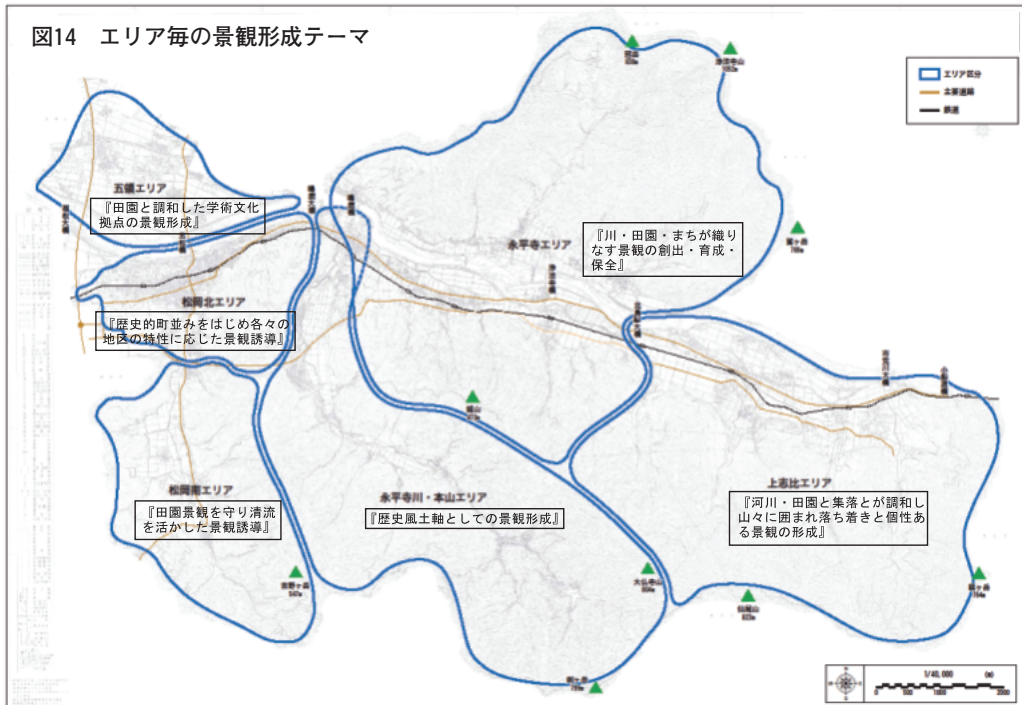


(出所) 永平寺町「永平寺町景観計画」平成20年5月 p56



#### 5-4 エリア毎の景観形成テーマ

次に、地形、土地利用、沿革、景観資源等により町域内の地域性がみられることから、大きく6エリアに区分し、エリア毎の景観の特性と課題を整理した上で基本方向と景観形成テーマを提案している。ここでは6区分毎の景観形成テーマについて図14に示す（なお、詳細な計画イメージ図は『永平寺町景観計画』を参照）。



#### 6. 今後の課題

特性を活かした景観形成計画の方向をのべてきたが、これが実効性をあげるための今後の課題をのべてまとめとする。

##### (1) 景観計画が実効性をあげるための課題

「永平寺町景観計画」は08年5月に告示された。しかし、これだけでは、景観の基本方向について行政の思いを示しただけで具体的な景観形成を誘導したり規制したりすることまではいかないのである。望ましい景観を積極的に誘導するには届け出対象行為と景観形成基準等を定めた景観条例の制定が喫緊の課題である。あわせて景観行政を推進する態勢の整備・拡充が望まれる。

また景観形成における行政、住民、事業者の協調が欠かせないことは先述したとおりであるが、このため景観協議会の活用、住民の意識啓発、参加する仕組み、普及広報活動、住民活動



を支援する専任の担当部署の設置が課題といえよう。

## （２）関連施策にかかる課題

景観計画の推進においては、景観に対する直接的の施策だけでなく他の行政計画の展開を講じてはじめて有効になる場合がある。例えば河川景観軸の形成に関しては河川の親水空間としての活用促進、釣り人などの来訪者と住民とのふれあい・交流を生む動線（歩道）ネットワークの整備、河川からの眺望障害への対応、眺望を楽しむ場として橋空間の活用があげられる。一方、アラレガコ、サクラマス等の回帰が可能となる生物多様性の維持・保全につながる河川環境（水質、生態系）、河川を大切にする心を育む社会教育等が課題となる。

歴史風土景観軸の形成に関しては、そのコンセプトを町総合計画とも関連させて位置づけることが課題といえる。また民間団体の動きである「天下一街道計画」<sup>56)</sup>等とも連携しながらこのコンセプトの熟成をはかることが課題といえる。

（以上）

## 注

- 1) 中村良夫ほか（1977）「景観原論」『土木工学体系13景観論』彰国社、p2
- 2) 景観法は2004（平成16）年6月全会一致で成立。同法は景観の基本理念、住民・事業者・地方公共団体・国の責務、景観計画など土地利用の行為規制、景観重要建造物等の景観構成要素、景観協定・景観協議会等の仕組み等を包括的に定めている。
- 3) 西村幸夫（2005）「序説―景観法の意義と自治体のこれからの課題」建築学会編『景観法と景観まちづくり』、p8
- 4) 後藤春彦（2009）「社会関係資本としての生活景」日本建築学会編『生活景』学芸出版社、p281
- 5) 日経新聞2009年10月2日ほか。広島県は控訴したが、国土交通省は静観の態度という。
- 6) 景観条例は福井、小浜、大野、越前、坂井の各市が制定。
- 7) 永平寺町景観協議会は住民代表、有識者、行政等の10名で構成、同会長は筆者。
- 8) 景観計画調査について町ワーキングチームと県立大学北條研究室が協同的に実施。
- 9) 住民意向調査（平成15年10月）は3町の合併前に実施。「まちづくり～資源」の回答サンプル2757票、「まちの将来像」は同2,807票。サンプル数が多いことから結果の有意性は十分にある。
- 10) 「サクラマスアンリミテッド WEBSITE」(<http://blog.sakuramasu.org/>) を参照した。同サイトにより敷衍すると、サクラマスアンリミテッドは1994年に結成されたボランティアで、09年までの稚魚放流は総数40万匹に達した。2007年福井県はサクラマスのブランド強化事業を開始し、九頭竜川から親魚を採捕し県産稚魚を育成・放流、サクラマスを通して福井県民の河川環境に対する意識の向上を図る事業の展開。また九頭竜川中部漁協は、サクラマスの回帰を目的とした本流への秋放流を開始した。こうした動きを成果と見てサクラマスアンリミテッドは2009年秋の放流をもって解散し、産卵場の整備を目的にしたサクラマス・レストレーション（再生）(<http://sakuramasu-r.org/>) に進化した。
- 11) 「でこんぼの森」会則第2条
- 12) 永平寺町「永平寺町要覧」2008年3月、p17、
- 13) 「福井新聞」(2007年1月5日) および特別展チラシ（04年11月）により敷衍すると、当初住民グループ6名が浄法寺山につながる登山道横の山林のなかにログハウス風山荘、バーベキューハウス、広場を整備（97、98年）。次に陶芸の場となる穴窯を手づくり（99年）、「でこんぼの森」という組織だった

- 活動は05年会員23名でスタート（現在33名）。これまで工房、里山整備（用水の周辺整備）等の体験の森づくり、親子サマーキャンプ、学校・子供会等での陶芸講座等作陶会員の活動のほかに地域社会の文化・社会教育活動の関係に広げて展開している。
- 14) 中部縦貫自動車道は長野県松本市～福井市の延長約160km、うち福井県内福井北 IC～油坂峠60km。永平寺町域では、一部区間が供用開始。
- 15) 篠原修ほか（1998）「景観用語事典」p57
- 16) 「千年水路が開く ふくい未来」九頭竜川下流域農業用水再編推進協議会ほか発行
- 17) 仙尾山は国土地理院地形図には呼称表示はないが、地元で呼ばれている山地名
- 18) 国土地理院作成の同地形図の作成時点は明治42（1909）年を皮切りに戦前（1927年、33年）、戦後は7時点（1949年、53年、64年、68年、74年、78年、82年）
- 19) 九頭竜川流域誌編集委員会「九頭竜川流域誌」九頭竜川水系治水百周年記念事業実行委員会発行、平成12年、p274
- 20) 人口集中地区 DID は、総理府統計局（現総務省統計局）が昭和35年国勢調査から導入。市区町村内における「都市的地域」を明らかにする統計上の地域単位として設定。調査区を基礎単位として、ア）原則人口密度が1平方km当たり4,000人以上の基本単位区等が市区町村内で互いに隣接して、イ）それらの隣接した地域の人口が国勢調査時に5,000人以上を有する地域とされる。
- 21) 21の細区分から9区分へ集約した類型は以下のとおり。細区分の九頭竜川、中小河川、ダムを「河川景観」へ。以下集落、市街地は「集落・市街地景観」へ。商業、工業、マンション等を「特定施設等」へ。歴史的建築、公共公益施設を「歴史・公共施設景観」へ。道路、生活道路を「道路景観」へ。公園、緑樹木を「公園・樹木景観」へ。鉄道、屋外広告物、空地、土石採取場、廃屋、その他を「その他景観」へ集約整理。
- 22) 例えば京都盆地は南に開いているが、東西北の三方は山で囲われた空間構造の典型。
- 23) 「福井のすぐれた自然データベース」(福井県自然保護課作成)によると「自然植生もしくはそれに近い植生、学術上貴重な種または個体の生育地」、区分はB（県レベルで重要なもの）
- 24) 釣鐘のような急傾斜で上に凸の山腹を持つ火山で、かつてこれはトロイデと呼称されたが、今日学問的に死語化している。
- 25) 手繰ヶ城山古墳、鳥越山古墳、石舟山古墳、二本松山古墳を松岡古墳群として指定。4世紀末から5世紀初頭のもので北陸屈指の巨墳として注目される。
- 26) 「越前五山」とは、白山、越知山、文殊山、蔵王山、日野山
- 27) 永平寺町教育委員会（1990）「越前波多野城跡」によると、中世（南北朝）の志比荘の山城だが単なる物見的な詰城と推定される。
- 28) 杉本智彦（2009）「カシミール3D入門」付録アプリケーション、実業之日本社
- 29) 松の老木から白山が幅広くながめられ旅人たちはお山を遥拝したと伝えられる。この松を「白山遥拝松」と呼ぶ。調査時点に存在したが、その後伐採された。
- 30) 水質環境も健康項目や水中の汚濁物質等の基準を達成。
- 31) 「福井県すぐれた自然データベース」によると「区分B（県レベルで重要）」
- 32) アラレガコ（和名カマキリ）は1935（昭和10）年国の天然記念物として九頭竜川中流域（福井～大野）が地域指定。親魚は11月下旬～12月アラレにうたれながら川を下り河口付近の海の沿岸で産卵することから福井ではアラレガコと呼ばれる。ふ化した仔魚は4～5月頃川を遡上する。幼魚期は主に水生昆虫を、体長100mmを超えるころからアユなどの魚を食べる。カマキリと呼ばれる所以。
- 33) 鳴鹿大堰周辺に棲む魚の種類は、54種類（1989～99年調査）。サケ、サクラマス、サツキマス、ウナ

- ギ、ヤマメ、アマゴ、ニジマス、ドンコ、コイ等が代表的。
- 34) 九頭竜川 river can ホームページ
- 35) 開削の歴史は古代に遡る。江戸期に芝原用水の開削、十郷用水の配分慣例制定、明治の大改修では1906年の大水害を契機に直轄河川に指定・築堤工事、昭和の大改修では裏川の締切による流路の一本化工事（1968年竣工）（この項「ウイキペディア」を参照した）
- 36) 鳴鹿大堰（312m）は、景観を配慮して大規模堰では日本初の油圧シリンダー直吊り長径間ローラーゲートを採用（04年完成）。
- 37) 平水流量とは1年を通じて日流量を大きい方から小さい順に並べ替えて算出し185日を下回らない流量のこと。
- 38) 篠原修編（1988）「景観用語事典」彰国社、p190
- 39) 石川治江編（2004）「川で実践する福祉・医療・教育」学芸出版社、p15
- 40) 福井勝義編著（1996）「水の原風景」、TOTO 出版、p234
- 41) 注38に同じ
- 42) 注38に同じ
- 43) 注38に同じ
- 44) 福井県の歴史散歩編集委員会（1991）「福井県の歴史散歩」山川出版社
- 45) 1908年福井～大野間、1925年永平寺口～永平寺門前間に鉄道が敷設されるまでの、交通が徒歩中心の時代の永平寺への道は4つぐらいあった。最もよく利用されたのは福井～追分で勝山街道と分かれ～吉野堺～越阪越え～諏訪間～京善～永平寺の参拝道である。このほか東古市～京善のルート、足羽郡高田村～宇佐大谷の峠のルート、岡保～梨の木峠のルートがあった。なかでも越阪は眺望のよい峠だったとされる。（「松岡町史上巻」p731）
- 46) 司馬遼太郎（1987）「越前の諸道・街道を行く18」朝日新聞社、p139、p140
- 47) 篠原修ほか（1998）「景観用語事典」P28
- 48) 坂井市丸岡町を震源地とする福井地震による死者3,579人、負傷者16,293人で福井市の全壊率79%、坂井平野全域平均60%超の被害率（隼田・笠松ほか著『福井県の百年』山川出版社、2000年、p274）で活断層による都市直下型地震で阪神淡路大震災に次ぐ被災規模である。そのうち松岡町の被災状況は倒壊566戸、半壊564戸、焼失84戸、計1,214戸で、震災前戸数1,501戸に対し罹災家屋率約8割、死者200人、負傷300人（松岡町『松岡町史、下巻―近代・現代編』昭和47年、p328）
- 49) 熊谷忠興（1982）「永平寺」大本山永平寺発行p46によると、本山永平寺門前の近くに門前大工、志比大工と呼ばれる社寺の造作を専門とする大工が住み代々本山の伽藍の修復、造作に従事したという。
- 50) 永平寺町「永平寺町環境基本計画」（平成20年3月）
- 51) 福井新聞（2008年4月2日）によると、興行寺境内に2本あった枝垂れ桜の1本は2度の火災にあい1本だけ残ったが、それも25年ほど前に幹の中に空洞ができはじめてからほとんど花芽が付けなくなった。樹木医の教えに従い幹にコンクリートを流し込み治療を施したところ、数年後に再び見事な花を咲かせた。
- 52) 景観法第55条
- 53) 連担市街地とは市街地が農地、山林などにより切断することなく平面的に連続しているものをいう。また、市街地が発展して他の市街地と接続することを連担するという（「建築用語辞典第2版」技法堂、1995年）。
- 54) 永平寺町「永平寺町景観計画」平成20年5月、p61
- 55) 注54、p56

- 56) ふくいやまぎわ天下一街道とは、「大本山永平寺・越前おおの・白山平泉寺・福井県立恐竜博物館・一乗谷朝倉氏遺跡・越前漆器・越前和紙・越前打刃物など福井の山際をつなぐ一帯に存在する8つの観光地や工芸品など『原型の日本の宝』が残る地域を結んだルートのこと」である（同街道広域連携協議会）。

＜参考資料＞

永平寺町『永平寺町景観計画』平成20年5月